

第 15 回 環境ボランティアリーダー海外研修報告書

財団法人 北海道国際交流センター (HIF) 事務局長
大沼マイルストーン 2 2 代表
池田 誠

1. 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして生かせるか。

今回の研修を通じて、リーダーとして生かせると思ったものは、出発時に課題とした 3 つのテーマだった。ひとつは、人材育成だったが、ラインランド・ファルツ州環境ボランティア研修制度は非常に興味深いものだった。高校卒業から 26 才までの若者が環境と自然保護に取り組む FOJ 制度。自らの意思で環境活動に関わるというシステムだが、自立と責任感を育てるとてもいい取り組みだと思われた。日本でも、日本国際ワークキャンプセンター (NICE) が 1 年間のボランティアである「ボライヤー」を推進しているが、年々参加する若者が増えている。また、5 箇所で FOJ 研修生や卒業生の話聞いたことも、研修による人材育成を学ぶ上で有意義なものとなった。また、地域の環境として訪問したボイムリング森の幼稚園では、年間を通じて森の中で学び幼稚園児の活動を見学し、自分のことは自分でやる、全体を決めるのは多数決でと、幼稚園児ながら、自分の意志を持つように育てるということは、幼い頃からの人材育成につながるものであり、日本でも生かしたいものだと感じた。

2 つ目のテーマは、組織運営だった。これについては、ドイツの環境保護を学んだローランド・ホーン氏の話の中で出てきたコミュニケーションの大切だった。行政や企業、そして NPO ではお互いに違ったセクターであり、文化も違うものではあるが、組織として動く場合には協力関係が必要なことも多く、対話の必要性、そして頭で理解するのではなく、心で理解させるという共感が組織運営で不可欠であることが感じられた。また、BUND のラインランド・ファルツ州支部での話では、広報に力を入れており、メッセージのひとつの伝え方としてのデモというのは面白い取り組みだった。実際、研修生自体も参加させてもらったが、20 名くらいの若者が楽しく、ユニークに動物愛護の活動デモをおこなったのは、いい取り組みだった。一方で組織運営のためロビー活動や、市民団体としてどの政治団体も宗教団体も、特定の組織と距離をおきながら活動するスタンスは組織運営での自律性を保つのに必要なことと感じた。

そして、三つ目がファンドレイズだった。ファンドレイジングアカデミーのリットー氏の話の中では、高齢者や知的階層からの寄付が多いということにつ

いて学んだ。会員サービスの徹底と、どんなところにもファンドレイズのヒントがあると想着て、チャレンジすることの必要性を感じた。その中でも、遺産相続が大きなターゲットとして上げられており、寄付の多様性を感じる事ができた。また、動物保護のためのヘルプカードや、マッチングファンドなどすぐに取り組めそうな事例もあり、今後の取り組みに学びの多いものとなった。また、最終日の講義であったファンドレイジング研究所のシュナイダー氏はファンドレイズをデータ分析することによって、どこをターゲットに広報するかが大切であり、どういう人たちに、何を提供するか、どのタイミングで、プレゼンするかという階層の中で、どういう人たちに提供するのかということが、大切などいうことをデータベースを使って説明してくれた。また、ファンドレイズ自体が行動心理学からも捉えられるものであり、人の心に感動を与えられることこそ、大切なキーワードであると思われた。自分たちのミッションはもちろん理解しているであろうが、外からはどう見られているのが、そして何をシンプルに伝えて寄付につなげてゆくのかは、団体自体としても、大切だと認識した。ファンドレイザーとは、理想主義者であり、お金では買えないものに貢献すること。そして、人格や哲学であり、カリスマであるべきとしたところも非常に印象に残った。

もちろん、3つのテーマだけではなく、研修を受ける中で非常に感銘を受けたのが、NABUの広報官ライナー氏の取り組みだ。年間スケジュールをつくる計画性や、新聞などのメディア発信の際の絶対に間違いのないように徹底したチェックを欠かさないなど広報担当としての堅実な取り組みが伺えた。それと同時に、NABUが地域で浸透してゆくように、事務所を地域に構え、日頃から顔の見える関係を築きながら、地域コーディネートしている姿が印象に残った。我々が訪れたワイナリーも地域でのつながりがなければ、簡単に見せてもらえるものではないだろうし、食事場所を選ぶのも、道行く人たちと明るく挨拶できるのも地道な地域での活動が故という気がしてならない。また、小さい部落ならではの特徵で、馬が合わなかったり、お互いに敵対している人も少なくなく、そこをどうコーディネートするかは、大変なことだと言ったのも、まさにドイツの日本の地域課題を共有できるものだった。

2. 研修を通して、日本の環境ボランティアリーダーを支援するために、どのような仕組が考えられるか

ボランティアリーダーを支援する仕組としては、3つ考えられる。そのひとつは、ネットワークをつくること。今まで50人以上の研修参加生がいて、ネットワークをつくっているが、もちろん単なる同窓会組織ではない。全国から

様々な状況の中で環境にかかわる活動をしている NPO のリーダーのネットワークは大きな力になると思われる。そして、そのネットワークの中心となるものは、アドボカシー（政策提言）だと思われる。会員を持つネットワーク組織だからこそできることを、環境ボランティアネットワークのメンバーを中心に構築してゆけたらと考えた。それはまさに環境 NGO である BUND や NABU の活動、そして会員数が大きなパワーになるという学びから、政策提言こそ大切なものだと思う。そして実際の政策提言については、やはりテクニックも必要なものであり、ボランティアリーダーの政策提言をつくるための資質を伸ばすような研修制度も必要だと思われる。

もうひとつは、情報の集約そして発信によるモチベーションの維持ではないだろうか。ボランティアリーダーにとって不安なのは、やはりこのままでいいのだろうか、そして持続的なイメージをもって活動できるかどうかがかぎとなる。一方でボランティアリーダーは日本全国で活動し、環境分野といってもエネルギーやリサイクル、生物多様性、そして環境保全など幅広く、お互いを補完できるものでもあり、また独自の取り組みなど共有したいものも多い。その中で、情報の吸い上げ、そこから推進できる事例のエッセンスをまとめて、それぞれのボランティアリーダーにフィードバックするという仕組みは大切だと考えられる。

そして、3つ目に上げられるのは、ファイナンスのことだ。ボランティアリーダーがいかにアイデアを持とうと、実践段階では財源の必要が出てくる。アクティブに活動するリーダーが社会をつくっていくためにも必要なことだ。もちろん、そのひとつは助成金や補助金といったもので、ひとつの財源として考えられる。しかし、今回の研修で学んだことを踏まえていうと、寄付や会員の増加を進める上での情報提供や、NPO のファイナンスに関わる会計講座、そして集約された情報の提供が、ボランティアリーダーの活動を勇気付けるものであり、持続可能な組織作りにつながるものではないだろうか。

3. 全体を通しての感想

最初にホテルに着いた日のオリエンテーションでのこと。この国では、手を上げるときに手のひらで上げないこと、指一本を上げるということだ。第 2 次世界大戦を率いたドイツのヒットラーが行った全体主義。それに反するがごとく人々が口にする「デモクラシー」。何としてもその過去には戻したくないという気持ちが表れている。もちろん、その「デモクラシー」は住民から火をつけてゆくような下から上への盛り上がりは理解できるが、議論の行き詰まるところで、必ずといっていいほど、呪文のように出てくるこのフレーズが、

ドイツという国の成り立ちを示していると感じられた。個人主義と投票、それに対して「和を持って尊し」とする日本的な社会。ある意味、対照的なものではあるがお互いのいいものをいかすことも大切なことだと考えられた。全日程を通じて深く考えさせられ、これからの日本社会や世界をどうしてゆくのかを考える上でも「デモクラシー」を推進してゆくことは僕自身の大きなテーマとなった。

そして、もうひとつ印象的なことは自主自律。幼い頃から自分のことは自分で決める。自分で決めたからには責任を持つという姿勢。そこは子どもも大人も同じだ。NPOのリーダーもここは是非、学びたいところだ。僕がかつて所属していた共働学舎新得農場でも、自分のことは自分で決めるシステムをとっていた。70名が衣食住を共にするコミュニティでほぼ自給自足の生活をしてきたが、朝と昼にはそれぞれ自分のやる仕事を皆に発表する。有機野菜、牛の世話、チーズづくりだったりする。ただ、仕事をしたくなければ「やりたくない」と言えばいい。日本版自主自律なんだろうと思う。自分の行動に責任を持つことは日本でもやっている。ドイツで学んだこと、日本にあると改めて思ったことでもあった。

次の世代へ、次の参加者へ伝えたいこと。ドイツの環境を学ぶものとしては有意義だと思う。環境省の取り組みから、企業とのフェンドレイズ、そしてNPOとしての役割りと全体がわかるカリキュラムが組まれている。ただ、あえて今後の参加者、そしてプログラムについて意見を言わせていただければ、日本の環境への取り組みのなかに「フライブルグ」の街に車を入れない、電動公共機関で入るといふ仕組みを見るのは有意義だと思う。

そして、行程の管理については、駆け足で昼食を食べるのではなく、きちんと時間をとりながら、ふりかえりをしつつ、食べる時間はあっていると思う。自分たちは良しとしても、このことをドイツ国民からどう思われるだろう。相変わらずな「働き蜂」と思われるのはちょっと違う気がする。そもそもドイツは働く、そして休暇を大切にす国民性なのだから。とはいいいながら、全体を振り返ると、きめ細かくプログラムが作られており、日本では経験できないものが多く取り込まれていた。

この経験を多くの人に伝えてゆきたいと共に、今回の海外研修に参加させていただいたことに感謝しています。次のプログラムがより良いものになるように、第15回海外研修参加者として提言してゆきたいと思います。いろいろな出会い、そして訪問先、研修プログラムをコーディネートに感謝しています。ドイツ研修で感じたこと、学んだことから新たな実践、そして地域の市民改革をおこしてゆきたいと思います。